

24. 十二弟子のひとりで、デドモと呼ばれるトマスは、イエスが来られたときに、彼らといっしょにいなかった。
25. それで、ほかの弟子たちが彼に「私たちは主を見た。」と言った。しかし、トマスは彼らに「私は、その手に釘の跡を見、私の指を釘のところに差し入れ、また私の手をそのわきに差し入れてみなければ、決して信じません。」と言った。
26. 八日後に、弟子たちはまた室内におり、トマスも彼らといっしょにいた。戸が閉じられていたが、イエスが来て、彼らの中に立って「平安があなたがたにあるように。」と言われた。
27. それからトマスに言われた。「あなたの指をここにつけて、わたしの手を見なさい。手を伸ばして、わたしのわきに差し入れなさい。信じない者にならないで、信じる者になりなさい。」
28. トマスは答えてイエスに言った。「私の主。私の神。」
29. イエスは彼に言われた。「あなたはわたしを見たから信じたのですか。見ずに信じる者は幸いです。」
30. この書には書かれていないが、まだほかの多くのしるしをも、イエスは弟子たちの前で行なわれた。
31. しかし、これらのことが書かれたのは、イエスが神の子キリストであることを、あなたがたが信じるため、また、あなたがたが信じて、イエスの御名によっていのちを得るためである。

## 説教

今日は主の復活節（イースター）です。今からおよそ二千年前のこの朝に、十字架で死なれたイエスさまは死からよみがえりました。イエスさまの復活は、私たちのキリスト信仰の中核をなし、実質をなすものです。なぜなら、もしイエスさまが予告していた通りに復活なさらなかったとしたならば、私たちは何のために教会に通い、洗礼を受け、教会生活を送るのかわかりません。私たちのキリスト信仰は中身の無いものとなります。

「だれでもわたしについて来たいと思うなら、自分を捨て、自分の十字架を負い、そしてわたしについて来なさい。」（マルコ 8:34）先週学んだように、このイエスさまの招きを聞き、チャレンジを受けて、死ぬ覚悟でイエスさまについて行ったとしても、イエスさまが十字架で死んでそれで終わりなら、一体弟子たちには何が残るといえるのでしょうか。優しかったイエスさまの記憶でしょうか。感動的だった説教の余韻でしょうか。あるいは、多くの人の病気を癒やした人も結局は死には勝てなかったという失望感でしょうか。

もしイエスさまが復活しなかったなら、イエスさまを信じる私たちキリスト者には何も残りません。多少の倫理的に正しい生き方とか優しさとか、そんなものしか残りません。

当時、多くの人は、イエスさまのことを偉大な預言者と見ていました。でも、イエスさまが、単に偉人とか偉大な預言者であったとするならば、私たちはその偉大なイエスさまの生き方に倣うという以外の結論を見出すことはできません。そして、私たちがどんなにイエスさまの生き方に倣ったとしても、それが一体どれほどの意味と価値を持つのでしょうか。イエスさまの生き方に感動し、感化されて、それを真似たとしても、人は、所詮罪人です。最後は神のさばきを受けて、永遠に滅ぼされる以外にありません。そして、どんなに偉大な預言者であっても、人間を永遠の滅びから救うことはできません。

イエスさまは、単に偉大な預言者とか偉人としてわざわざ世に来られたのではありません。ペテロが告白したように、「キリスト」、

すなわち「救い主」として世に来られました。それは、罪のために滅びるしかない罪人を、罪と滅びから救う救い主です。確かに、イエスさまは、何一つ罪を犯さず、100%父なる神に従い抜いて、死に至るまで従順を貫いた「義人」であり、その意味では偉大です。でも、その正しさは、ただ人々から称賛されるためのものではなく、人の身代わりとなるためのものでした。すなわち、何一つ神に従い得ない、100%不従順で罪深い私たちの身代わりとなって、神のさばきを受け、その身代わりの死によって、私たち罪人を滅びから救ってくださったのです。イエスさまが身代わりに十字架で死んで、罪人に下されるべき神の怒りと呪いを残らず受けてくださったことにより、100%神に従い得ない罪人は、100%神に従い抜く義人と認められて、地獄の滅びを免れ、天国に行くことができます。キリストの十字架の死は、いかなる罪人をも地獄の滅びから救う神の力です。

イエスさまの復活は、このことに確証を与えるのです。イエスさまが死んで、復活しなかったならば、生前説いてくださった天の御国の話も、永遠のいのちの話も、まるで遠い遙か彼方のことであり、自分には関係あるのか無いのかもよくわからない、雲の上の空想話に過ぎません。自分もまた、果たして救われるのか救われないのか迷います。死ぬ覚悟で従って来たのに、イエスさまが十字架で死んで終わりなら、一体誰がこの責任を取ってくれるのかと問いたくなります。でも、イエスさまはよみがえりました。死人の中から復活なさいます。そして、イエスさまが復活なさった時、生前イエスさまがなした一切のわざ、そして、語ってきた一切の教えが真に実質を持つようになるのです。

「自分を捨て、死ぬ覚悟でわたしについて来なさい。」そう教えたその直後にイエスさまはこう宣言なさいました。「いのちを救おうと思う者はそれを失い、わたしと福音とのためにいのちを失う者はそれを救うのです。」イエスさまが復活なさる前には、この言葉を本当だろうか、従っても大丈夫だろうかと疑った者もいたかも知れません。でも、イエスさまが復活し、復活のイエスさまを見た者は、もはやこの意味を疑う必要はありませんでした。なぜなら、イエスさま御自身が、文字通り、いのちを捨てて、本当に死からよみがえったからです。弟子たちは、理屈ではなく、永遠のいのちそのものをその目で目撃しました。

今日のテキストも、復活のイエスさまを目の当たりに目撃したひとりの弟子、トマスをめぐる話です。

イエスさまは、復活して後、その日の朝、マグダラのマリヤに最初に現れ、それからペテロをはじめ、他の弟子たちに現れます。でも、そこにはトマスはいませんでした。その日、トマスは、他の弟子たちと「いっしょにいなかった」ので、イエスさまと会えなかったのです(ヨハネ20:24)。それで、弟子たちは、トマスに「私たちは主を見た」と報告するのですが、トマスはそれを信じません。そして、こう言うのでした。「私は、その手に釘の跡を見、私の指を釘の所に差し入れ、また私の手をそのわきに差し入れてみなければ、決して信じません。」(25)

このトマスは、「自分を捨て、自分の十字架を負い、そしてわたしについて来なさい」とのイエスさまのことばをまともに受けとめたからか、「私たちも行って、主といっしょに死のうではないか。」と他の弟子たちに呼びかけたほど、ある意味、単純というか潔い人物でした。(11:16) とは言え、イエスさまが逮捕された時には、他の弟子たちと同様、命惜しさにさっさと逃げ去ってしまいます。それから、イエスさまが十字架で死ぬ所を見届け、その三日後にイエスさまがよみがえって、それを見たという弟子たちのいくつもの目撃証言を聞くことになるのですが、それを「決して信じません」と、これ以上ない強い言い方で否定するのです。

イエスさまについて来たのに死んでしまった、これ以上人の話など信用できるかという不信感によるものかも知れませんが、あるいは、自分の五感できちんと確認できるものでなければ信用できないといった近代合理主義者の先駆けと言えるかも知れません。イエスさまの「手の釘の跡」「(槍で突き刺された)わき」を特別に挙げているのは、復活のイエスさまが他の弟子たちに現れた際、「その手とわき腹を彼らに示された」からです(20:20)。彼らが「見た、見た」と言っているその傷跡を自分も見て、検証してみなければ、他の弟子たちの言っていることは信用できない、彼らの言う「イエスさま」は「似た別人」か、あるいは「幽霊」に違いないということになるでしょう。

すると、それから「(数えて)八日後」に、復活のイエスさまが、再び、弟子たちに現れます。やはりユダヤ人の追っ手を恐れてか、鍵をかけていた部屋にイエスさまが現れて、「平安があなたがたにあるように」と祈ります(26)。そして、見ないと信じないと言い張っていたトマスに、こう言われたのです。「あなたの指をここに付けて、わたしの手を見なさい。手を伸ばして、わたしのわきに差し入れなさい。信じない者にならないで、信じる者になりなさい。」(27)

これは、先のトマスが言い張っていた一言一句に答えるものです。トマスは、見ないと信じない、触って見ないと信じないと言っていたのですが、姿は見えなくても、復活のイエスさまは、トマスの言う言葉一言一句を聞き漏らすことなく、全部聞いておられたのです。イエスさまは、両手の釘跡、槍で突き刺されたわき腹の傷を示して、触るよう命じます。そして、こう言われたのです。

「信じない者にならないで、信じる者になりなさい。」

これを聞いたトマスは、思わず「私の主。私の神。」と告白します。復活の主イエスさまが、自分にも現れてくださり、見ないと信じないと言い張って、仲間の証言を決して信じようとしなかった自分の不信仰な一言一句を全部聞いておられたことを知って、嬉しいやら、恥ずかしいやら、ありがたいやら、とにかく、イエスさまの愛に圧倒されて、トマスは「私の主。私の神。」、「あなたこそ私の主人です。あなたこそ私の神です。」そう告白するのです。

「私の主。私の神。」この告白は、ヨハネの福音書の、いわば頂点をなすものです。ヨハネの福音書はその冒頭に於いて、イエスが神であることが宣言されましたが、その締め括りに於いて、イエスこそ神であることが、弟子のひとり、トマスの口をもって告白されました。しかも、単にこの世界を創造し、支配する神であるという告白にとどまることなく、「私の神」と告白するのです。「私の主。私の神。」とは、要するに、「私にとっての主人。私にとっての神」という意味です。当時、「主」「神」と呼ばれるものなら他にもいくらでもあったのですが、トマスが求めていたのは、自分にとっての「主」であり「神」でした。もっと言えば、自分と関係ある「主」であり、自分を愛してくれる「主」です。

イエスさまは、トマスを愛し、トマスを教え、トマスの身代わりとなり十字架で死んで、トマスの罪を贖って、復活し、彼に現れ、彼の言葉を一々全部聞いて、それに答え、不信仰なトマスに、イエスさまへの揺らいだ信頼を回復させようと、イエスさまへの信頼をいよいよ確かにしようと、堅くしようと、働きかけておられるのです。こうして、イエスさまに信頼してついて来たトマスが、ガッカリしないで、かえって励まされ、復活のいのちの信仰に生きるよう、全面的に助けてくださっているのです。

この世の一切の束縛を超越し、自分のこの世でのいのちにも縛られずに、天国を目指し、イエスさまのように、自由に、大胆に、ただ神のみこころだけを行って、束の間この世に於ける人生を全うするようにと、イエスさまは、死からよみがえった復活のいのちをトマスに示し、釘で打たれた両手と槍で刺されたわき腹を示して、「このわたしを信じなさい」と言われたのです。トマスにとって、復活のイエスさまは、彼の全生涯を支え、助け、導く、まさしく「私の主。私の神」なのです。

この復活の主にあされ、生かされている交わりに、「いのち」があります。主との交わりこそが、永遠のいのちなのです。復活の主が生かされている恵みを信じ、これに感謝し応えて生きる、ここに私たちキリスト者の信仰があります。それは生きた信仰です。復活の信仰です。トマスのみならず、「見ずに信じている」私たちもまた、いのちそのものなるこの主との交わりに招かれているのです。

『トマス行伝』

イエスの死後、弟子たちの間で世界を区分し、それに従ってそれぞれの国へ福音を宣べ伝えるために出て行くことになった。

くじを引くと、トマスはインドに当たり、最初、トマスは行くことを拒む。

自分は長旅できるほど強健ではない、と辞退。

そして、言った。

「私はヘブル人です。インド人の中に行って、どうして説教できるんですか。」

すると、その夜、イエスが現れて言う。

「恐れるな。トマス。インドに行って、そこでみことばを宣べ伝えなさい。」

しかし、トマスはなおも強情に拒む。

「あなたがお遣わしになるところなら、どこへでも参ります。

ただ、インドにだけは行きたくありません。

他の所に遣わしてください。」

すると、たまたま、アバネスという商人がインドから来た。

腕利きの大工を見つけてインドに連れてくるようにとの王命を受けて派遣されてきたのだ。

トマスは大工だった。

イエスは市場にいるアバネスの所に来て彼に言った。

「大工を買いたいのか」

「はい。そうです。」

イエスは、「私には大工の奴隷がいて、売りに出したいのだが」と言って遠くにいるトマスを指さした。

そこで、二人は価格を決めてトマスは銀三リトラで売られることになったが、契約書にはこう書かれていた。

「大工ヨセフの子であるわたしイエスは、

トマスという名のわたしの奴隷を、インドの王グンダフォルスの商人アバネスに売ったことを誓約する。」

この証書が書かれると、イエスはトマスのアバネスの所へ連れて行った。

アバネスは言った。

「これはお前の主人なのか」

「はい。この方が私の主です。」

「私がこの人からお前を買った。」

トマスは黙っていたが、朝早く起きて祈った。

「主イエスよ。あなたの望む所ならどこへでも参りましょう。あなたのみこころがなされますように。」

こうして、トマスは、イエスさまの祝祷に送り出され、（）商人のもとに行った。

（支払われた）自分の代価以外は何も携えていなかった。

物語は続く。

インドの王は、トマスに宮殿を建てるよう命じて材料費と人件費を十分に与えるも、トマスはそれを全部貧民に施してしまう。

しばらくして、「宮殿は建ったか」と聞くと、「はい」とトマスは答えるので、「いつ見に行ったらいいのか」と聞くと、

「あなたさまは、今はそれを見ることができません。王さまがこの世を後になさる日にご覧になれるでしょう。」

すると、王は烈火の如く怒り狂ってトマスの投獄と処刑を命じたので、いのちも危険にさらされるが、

後に王もキリストに捕らえられてトマスのインド宣教は大きく前進していくことになる。